ふたり

市村

ふたり

結局のところ、僕は彼女のことを何も知らなかったのだ。彼女の好きな色も、彼女の好きな動物も、焼きたてのパンに塗るジャムの味も。僕はいつだって僕の両目の先にあるものしか見てこなかった。その背中で彼女が何をしていたのか。そして彼女が何を隠していたのか。それらを僕は知らない。知らなかったことさえ知らなかったのだ。僕は彼女のことを何も知らない。

結局のところ、君は私のことを何も知らなかったのだ。私の好きな花も、私の好きな季節も、起きぬけに飲むコーヒーに入れる砂糖の数も。君はいつだって君の見たいものだけを見てきた。その視界の外で私が何をしてきたのか。そして私が何をしたかったのか。それらを君は知らない。知ろうともしなかったのだ。君は私のことを何も知らない。

2012年10月7日。彼女は消えた。街にカーディガンが咲き始める頃、雨の降った日曜日に彼女は消えた。壁にかけられたホワイトボードに小さく書かれた「さよなら」が、彼女の残した唯一の痕跡だった。薄ピンク色の歯ブラシも、リトルミイのマグカップも、毛玉のついたブランケットも。全てが彼女と共に消えていた。まるでハーメルンの笛吹きに連れられていったネズミのように。彼女の持ち物は彼女の後に続いていったようだった。

2012年10月7日。私は消える。木の葉が朱色を強める頃、天気の悪い週末に私は消える。壁にかかっていたホワイトボードに小さく「さよなら」と書き、そして私はそれのみを残す。水玉模様の枕カバーも、焦げ茶色のボールペンも、お気に入りの作家の小説も。全てを私は持ち去った。まるでマッチ売りの少女が見た幻想が、マッチの火と共に消え失せてしまうかのように。私の持ち物が私の存在と一緒に消えてしまうように。

あれから僕は毎週末ここを訪れている。駅から少し歩いたところにある小さなカフェ。二年前の冬、僕と彼女はそこで出会った。応用情報技術者試験の勉強をしていた僕は、一人の女性がこちらを見ていることに気づいた。僕がその視線に自分の視線を重ねると、彼女は恥ずかしそうにうつむくのだった。そして僕らは出会った。どちらが初めに話しかけたかは覚えていない。何日かをかけて徐々に近づいていった座席は、そしてついに隣り合わせになった。そこで過ごす時間は、僕にとって永遠だった。

あれから私は初めてここを訪れる。駅から少し歩いたところにある小さなカフェ。二年前の冬、私と君はそこで出会った。何かの試験勉強をしていた君は、私がそちらを見ていることに気づいた。君はその視線の先にある私の両の目を見つめるので、私は恥ずかしくてうつむくのだった。そして私と君は出会った。初めは君が私に話しかけてきたのだ。次に会うときはまた一つ近い席を選び、そしてついに隣同士を選ぶようになった。そこで過ごす時間は、私にとって一瞬だった。

＊

カランコロンカラン。カフェのドアが開けられる。その女性はシンプルなホットコーヒーを注文すると、砂糖を二つ手に取り、店の奥へと向かった。店の奥の席には一人の男性が静かに本を読んで座っていた。二人がけのテーブルが左右に二つ並んでいる。その左側の奥の席に座り、男性は書店のカバーをしたまま、本を読んでいた。女性はゆっくりとその歩みを進める。女性がその二人がけのテーブルに近づく。すると男性はその女性の存在に気づいた。何秒かの沈黙が流れる。そして男性は静かに言った。

「あ、すいません」

　男性は二つのテーブルの中央に置いた自分の荷物を持ち上げると、自分の足元へと移動させた。
　女性は軽く会釈をして、その右側の奥の席へと座る。
　男性は再び目線を読んでいた本に戻す。
　女性は注文したホットコーヒーに砂糖を入れる。

　"僕"にとっての"彼女"も。
　"私"にとっての"君"も。
　ここにはいない。

　＊

　そして、"僕"は"私"の視線に気づく。